

**「持続可能な発展」を視野に入れ、多様な人々との出会いを通して、
自己意識や価値観の形成・変容をめざす総合的道德教育プログラム**
～ 国際バカロレア・MYP認定校の特色を生かす学校設定領域、国際教養の学びのあり方 ～

東京学芸大学附属国際中等教育学校 出口利定（校長） 秋山寿彦 古家正暢
杉本紀子 山本勝治 荻野 聡

【WGの概要 学校設定領域・国際教養における道德教育】

グローバル化が加速度的に進展するなか、国際バカロレア機構（IBO）のミドルイヤーズプログラム（MYP）という世界標準の教育システムを視野に入れ、平成19年4月に開校した東京学芸大学附属国際中等教育学校では、6年一貫教育の中等教育学校で学ぶ生徒が、それぞれの個性や特色、持ち味を生かして「教養の構築」と「豊かな心の育成」をめざして学んでいくことができることをねらい、学校設定の新領域として国際教養を設定した。

国際教養は、本校の教育課程上において、学習指導要領で示される道德、総合的な学習の時間、及び学級活動を統合し、更にそれらの領域と教科学習との連携を図り、学習の深化、補充、発展をめざす学習として位置づけられている。

同時に、国際教養で展開される道德教育は、学習への姿勢（ATL）・多様な環境・人間の創造性・コミュニティと奉仕・健康と社会生活という5つの領域の相互作用・関連（以下AOI）を背景に、人間理解・国際理解・理数探究・LEを柱とした「ホリスティック」な内容構成を図っている。

そして、国際教養における学習の到達目標としては、第5学年終了時に、生徒一人一人が、英語を用いてディスカッションすることができる力を獲得し、外国人をはじめとして異なる価値観を有する人々や海外の学校をも視野に入れて、学びの成果を広く発信し、交流に意欲的に取り組むことができる生徒の育成を掲げた。

これらを学校設定領域、国際教養の原則とし、次の6点に留意し、道德教育でもとめられる体験的な学習・活動に関するプログラムの充実を企図した。

- ① ワークキャンプやフィールドワーク、スクールフェスティバルなどの学校行事を国際教養の学習の中核に位置づけ、体験学習を基盤として道德教育における、生徒の主体的な活動、新しい学習指導要領で課題とされる言語活動、表現活動の充実を図った。
- ② 「多様性」や「個性」を尊重する道德教育を実現していくために、学級の枠だけにとらわれることなく弾力的に学習集団を編成し、生徒の相互交流、相互啓発を図る学習や上級生の学びをモデルとする学習を多く取り入れた。
- ③ 保護者や外部の専門家及び専門機関との連携を図ることで、生徒の学習への関心や意欲を高めるとともに、道德教育における体験活動が、教科学習とも連携していくという発展的な学習となることをめざした。
- ④ NIE（学校教育に新聞を教材として取り入れる活動）の推進校として、道德教育において新聞を活用する技能及びコンピュータに関する情報に関する技能（skill）の習得に取り組みプレゼンテーション技能の形成を高める活動を多く取り入れた。また、プレゼンテーション活動を単なる発表に留めるのではなく、対話や議論へと接続していく指導を試みた。

- ⑤ 道徳教育における「奉仕」に関わる体験的活動は、IBO が示す AOI、特にコミュニティーサービスとして展開し、具体的な諸活動を生徒が、教師の適切な支援・助言を受けながら自主的に試みていく活動の充実を図った。
- ⑥ 平成23年1月に、「ユネスコスクール」（国際連合教育科学文化機関）の加盟学校となり「持続可能な発展」（sustainable development）を本校の研究テーマのキーワードとし、道徳教育においても、「持続可能な発展をめざす生き方や社会構築のあり方」を視野にとらえた学習のあり方を重視している。

【研究成果】

総合的道徳教育プログラムとして平成22年度から平成23年度に実践した主な体験活動

<実践事例1>

「国際バカロレアの MYP の学びを体験するワークキャンプ～豊かな心を育てる体験活動」

<実践事例2>

「保護者をゲストティーチャーに迎え、「仕事」について学ぶ ～将来の夢を育むとともに社会の現実に触れる～」

<実践事例3>

「コミュニティーサービスのプロジェクトを構想し、具体化してみよう！ ～練馬ボランティアセンターとの連携を核として～」

<実践事例4>

「国際中等教育学校における学校生活に関する「マナー討論会」 ～規律・規範の内面化をめざす討論のあり方～」

<実践事例5>

「『豊かさ』をキーワードする総合的道徳単元の試み」

<実践事例6>

「海外ワークキャンプ（アメリカ合衆国・シアトル市）における現地生徒とのディスカッション 東日本大震災と原子力発電を事例として ～道徳教育における異文化交流と国際理解～」

<実践事例7>

「道徳的体験の言語活動化と発信 ～新聞各紙への意見投稿～」

【本実践活用への展望】

東日本大震災後の日本人の秩序だった行動と深刻な被害を受けた方々に対する深い思いやりを生み出す道徳教育のあり方に関心を有するシンガポール・南華中学校の4人の教員の視察を11月14日に受け、本校の国際教養における道徳教育の取り組みを報告したところ、国際バカロレア機構という国際標準の枠組みを有効に生かし、学校における知的な学びと心の教育のむすびつきを新しいかたちで示しているとの評価を受けた。

また、学校における道徳教育を今後さらに、進化・発展させていくためには、道徳的な体験活動と教科・特別活動・総合的な学習の時間との「連携」及び各学校・学年・分掌における教師それぞれの「連携」がもとめられる。本実践は、不十分ではあるが「ホリスティックな学び」の重要性を道徳教育においても意識して、実践を試みたものである。